

障害者家族の高齢化に伴う子ども支援の困難

—家族内ケアをめぐる限界と社会的支援—

○北星学園大学短期大学部 氏名 藤原里佐（004865）

キーワード・成人障害者・性別役割分業・高齢期

1. 研究目的

家族内でのケア役割をどのように分担、分散するのか。育児、介護一般に関しては、社会的な関心と議論が深まってきた面も見られる。地域における子育て支援の充実化、高齢者介護の社会化は、ケアの担い手による切実な声が、制度やサービスの構築を促してきたとも言える。翻って、障害者家族の問題はどうであろうか。障害種、障害程度、障害症状の固有性と多様性などを超えて、普遍的な議論ができているとは言い難い。

知的障害者は、自己決定や日常のケア、社会参加や経済的な側面においても、長期的に家族の資源に依拠する場合が多い。障害者の生活のありようは、家族のケア力と経済力に規定されるという面があることは否めない。では、家族内ではそうした事象をどう捉えているのか。障害児者のケア役割をめぐるのは、母親がそれに従事し、父親の介在が少ないという調査結果もあり、性別役割分業の固定化が進むことが指摘されている。

しかし、そうした態勢が長期化することのリスクについては、これまでの研究でもあまり言及されていない。子どもの加齢化に伴い、親は高齢化し、要介護状態になったり、年金生活になったりという変化が生じる。成人障害者を高齢の家族がケアすることの限界は明らかであるが、家族のそうした実態は、より深刻化するまで可視化されないのではないだろうか。ここでは、高齢期を向かえた障害者家族に着目し、家族内ケアが困難となる状況とそれまでの経過、家族内の人的資源、経済的資源をめぐる配分の実態、家族メンバーの役割意識について考察する。家族内部に生じる経済的不安や家族間の葛藤を社会構造的な問題として捉え、支援のあり方を探ることが本研究の目的である。

2. 研究の視点および方法

筆者は、これまでの研究の中で、知的障害者の家族が一生という単位で、子どもの生活を支えることの不利と不平等を指摘してきた。家族の一人、とりわけ母親が子どものケア役割を恒常的に担うことによって、心身の疲労、社会参加の場面からの疎外、経済活動からの排除などの問題が生じる。そのことは、家庭内の性別役割分業を強固なものとし、ケアの担い手としての生き方を社会的に期待されることにも結びついてきた。一方で、高齢期を向かえた家族が、成人期の障害者との暮らしを維持する上では、家族内でのケア役割の分散、社会的サービスの利用とそれに伴う経済的基盤の確保が必要となる。つまり、親世代の高齢化は、健康面や体力面の退行や、ケアの担い手が要介護状態になるなど、それまでの通りの子ども支援が困難となることが予想され、家族内のパワーバランスを再考し、社会的支援のニーズを顕在化させる段階になる。

そこで、成人障害者との在宅生活を継続している家族への聞き取り調査を通して、ケア役割の比重とそれに伴う意識、向齢化・高齢化による家族内バランスの変化、子どもへの経済的支援の必要性、地域での在宅生活を継続する上での社会的支援のニーズを明らかにする。家族内の状況は、子どもの日中活動などを支援している職員も「見えない」問題であることを踏まえ、高齢期の家族への支援のあり方を検討した。

3. 倫理的配慮

本研究は、日社会福祉学倫理指針を遵守している。

4. 研究結果

成人期の知的障害者と家族の生活は長期化し、その間に、家族規模の縮小や社会参加の機会の減少、家計の変化などが起きている。しかし、成人期知的障害者のライフイベントが多いとは言えない中で、障害者自身の通所や通勤ができていれば「生活安定」が保たれているとみなされがちである。生活介護施設や就労先の支援者が、家族内のパワーの関係や、家族の健康状態、経済的状况などについて把握することが難しい中で、家族ケアの限界や生活困窮が進行するというリスクがあった。親の高齢化により、経済的基盤、ケアの態勢、医療や福祉サービスとの関係調整などに変化が起きるが、困難が生じて、まずは家族の自助努力による解決が期待され、この一連の経過の中で、「親亡き後の子ども」に対する不安が家族の中で高まっていく。

そして、障害者家族の生活歴の中で構築されてきた、子ども支援に対する強い責任感、家族ケアの優位性は、高齢化の途上でそれが維持できないことへの葛藤や不安となっている。障害当事者のみならず、長くケア役割を担ってきたがゆえに抱えることになる、家族の不利や不平等の問題も当事者性を帯びていると言える。また、そのことは、家族ケアの限界をキャッチし、支援の手がかりを探る根拠になるのではないだろうか。

5. 考察

- ・「家族の含み資産」によって障害のある子どもを支えてきたことが、家族全体の所得、マンパワー、資源の分配に関しては、不利な結果を招くことになる。
- ・親の経済力やその分配のあり方が、成人障害者の社会参加の機会や自立生活の可能性を方向づけるものになり、家族の高齢化や、「親亡き後の生活」と密接に関係していく。
- ・成人障害者に対する支援のニーズは多様であり、重層的であるはずでありながら、この点における社会的な議論が成熟していなかったことが、支援の遅れと困難に至っている。

本研究は、科学研究費助成事業 基盤（C）〈障害児者家族の高齢化とその諸相－親役割の長期化と「限界」〉（代表：藤原里佐（北星学園大学短期大学部））による研究成果の一部である。